原先生との十数年を振り返って

政策研究大学院大学　教育支援課教育プログラム室長
近藤留美

原先生との出会いは、十数年前に当時所属していた特定非営利活動法人アジアシードのプロジェクトになります。著名な東京大学教授ということで、緊張の中初めてお会いした時は、小柄な体から発せられる膨大なエネルギー量に圧倒され、勝手に想像していた「東大教授」のイメージとはかけ離れているようでいて、いやこの強烈な個性は研究者以外ではあり得ない、と思ったことを覚えています。

アジアシードでは、原先生と一緒に東南アジアの様々なプロジェクトに携わりました。日本と東南アジアの政治家が、毎年夏休みに絡めて集まり交流するという事業では、東南アジアの政治経済にかかる多岐にわたる諸問題につき、有識者として現役政治家と熱心に議論を交わす一方で、会議が終わると同行されていたご夫人と仲睦まじく過ごされ、嬉しそうにお子さんの仕事のお話しをされていたのが印象に残っております。またベトナムに出張に行ったときには、船のレストランでイカフライを一緒に食べたことを鮮明に覚えています。なぜ覚えているかといいますと、先生がイカをリクエストされたにも関わらず一口しか召し上がらず、あとはビールをずっと飲まれていたため、私が残りのイカフライを大量に食べる羽目になったからです。その後も何度か食事をご一緒しましたが、ほとんど食べ物を摂取されているところをみたことがなく、活動量に見合わない燃料の量に、先生のお体は一体何をエネルギー源としているのだろうと、よく不思議に思っていました（タバコだな、と結論付けるところまでがセットです）。

その後転職した政策研究大学院大学でも、原先生はインドネシアの教育プログラムのディレクターとして活躍されており、思いがけず長いお付き合いとなりました。インドネシアの教育プログラムでは、学生からは「日本の父」のように慕われていたようです。そういえば、最後となってしまった科目の授業アンケートで"Professor Hara is very good and cute"と回答していた学生がいましたが、原先生の感想をお聞きすることが出来なかったのが悔やまれます。

大学の運営事務局では、誰も一度も見たことのない幻の教員も多くいますが、そのような中で原先生は頻繁に事務局まで足を運んでくださる、フットワークの軽い気さくでマメな先生でもありました。周りがつられて笑ってしまうような大きな笑い声と温かいお人柄で、学生だけでなく、事務職員からも慕われていました。あまりにも急なお別れとなってしまい残念でなりません。心よりご冥福をお祈りいたします。

道具を場所に引き戻す

東京大学東洋文化研究所　教授
佐藤　仁

一九九二年の秋だった。当時大学四年生だった私はかつて原洋之介先生の職場であった東京大学東洋文化研究所七階に位置する汎アジア部門室で、開発経済論の授業を受けるべく、担当教員の原先生の登場を待っていた。この授業をとろうと思ったのは、原先生の『クリフォード・ギアツの経済学』（リブロポート、一九八五年）を愛読していたからである。大学院に進学して開発問題を勉強したいと思っていた私は、「スコット・ポプキン論争」と呼ばれた東南アジア農民の合理性をめぐる原先生の鮮やかな整理に刺激され、西欧近代の「普遍性」を発展途上国の「個別事例」から問

い直す方法を模索していた。

定刻より少し遅れて原先生が現れる。手には、鉄瓶のようにずしりとした灰皿をぶら下げ、ゼミのテキストで翻訳出版されたばかりのヤーノシュ・コルナイ著『資本主義の大転換』（日本経済新聞社、一九九二年）を脇に挟んでの登場である。経済理論そのものよりも、それが生み出される文脈、それが適用される対象の特殊性に注意を払うのが原先生のエコノミクスである。コルナイの著書はアジアに関するものではなく、計画経済がいかにして市場経済に移行するか、という東欧の研究である。しかし、歴史と文化という固有の初期条件を重んじる点で、コルナイと原先生の考え方は共鳴していた。

講義に熱が入ってくると、原先生は持参した灰皿を体の近くに引き寄せ、おもむろにタバコに火をつけて、おいしそうに一服する。私が学生だった一九八〇年代後半から九〇年代前半は、教室でタバコをくゆらせながら授業する先生は珍しくなかった。教室に煙を吐き出す先生の所作には、現場と学問を架橋している人にしか出せないと感じさせるほどの独特のカッコよさがあった。

原先生と初めて出会った大学四年の時期の私は進路に悩んでいた。そして、しっかりとしたフィールド体験と現地語の習得が開発のキャリアに不可欠であると自分なりに結論し、大学院への進学を決意した。原先生はかつてバンコクの国際機関に出向されており、タイの大学に知古が多かったのは私にとって幸いした。大学三年次の夏休みをタイの農村で過ごした私は、長期でフィールドワークをするならタイと決めていたからである。原先生には、バンコクにあるカセサート大学にビザを出してもらうための推薦状を執筆していただいた。そして、その後二年近くに及ぶタイ留学の成果を博士論文としてまとめた私は、迷うことなく副査の一人に原先生をお願いした。

タイ中西部奥地の人々がどのように森に依存しているのかをテーマにした私の研究で、原先生に特に関心

をもっていただいたのは理論や主張ではなく、データの集め方であった。私は村人が森に依存する度合いを測る方法として、彼らの食べるものに注目し、何人かの村人に食事の記録をつけてもらった。その際、読み書きのできない村人にも調査を手伝ってもらえるように「森のおかず」をイラストにしてみたのだった。原先生はイラストの中でも特に「トカゲ」を気に入ってくださり、「トカゲが立ちあがっているのが面白いね」と審査会の場で冗談交じりのコメントを発し、緊張した場の雰囲気を和ませてくれた。

博士論文提出後まもなく、その成果の一部を原先生が編集委員を務めていた「開発と文化」シリーズの第五巻『地球の環境と開発』（岩波書店、一九九八年）に収めていただく光栄にあずかった。ちなみに、この本のもう一人の編者である川田順造先生も駆け出しの大学院生だった私を励まし、かわいがってくださった恩人である。ともかく、「豊かな森と貧しい人々」と題して世に送り出された私の初めての公刊論文は、原先生の編著に収められることで追い風を受け、その後の私のキャリアを切り開く糸口になった。

思えば、一九九八年にジェームズ・スコット教授を慕って一年間、イエール大学に赴いたのも、原先生の著書を通じてスコットの仕事に触れていたからである。専門分野を決めきれなかった私が経済学に傾きかけたときは、ケンブリッジ大学のパーサ・ダスグプタ教授の下で学んではどうかとお勧めいただいたこともあった。結局、経済学の道を進まなかった自分が、まさか二〇年後に原先生の後任として、東洋文化研究所に着任する日がこようとは。こうして自分の過去三〇年の歩みを振り返れば、原先生の手のひらから飛び出すどころか、見事にその中に納まった経歴を歩んできたことがはっきりわかる。

東洋文化研究所に着任して一〇年が経過し、東文研がすっかりホームに感じられるようになっていた二〇二一年三月、私は学生とおこなっているオンライン読書会でコルナイの自叙伝 By Force of Thought（邦訳

『コルナイ・ヤーノシュ自伝 ―思索する力を得て』日本評論社、二〇〇六年）を紹介しようと思い立った。奇しくも原先生がお亡くなりになる前月である。母国ハンガリーに深い根をもちながら、米国でも活躍したコルナイの半生を描いた本書は、大学における優秀な研究人材のリクルート方法から、外国人として英語で論文を書く意味に至るまで、目から鱗の自叙伝である。このタイミングでなぜこの本を想起したのかは自分でも分からない。しかし、はっきりしているのは、あの時に原先生の授業をとっていなければ、コルナイの名前すら知ることはなかったということだ。コルナイも原先生も、経済学の主流にいたわけではなく、むしろ進んで傍流にあろうとした研究者である。原先生には支配的な考え方と距離をとり、自分なりに考えることの大切さを教わった。いや、それを教わったのだと悟ったのは、この文章を書いているときであった。

改装前の山上会館大会議室で行われた原先生の東京大学最終講義は個性的だった。これまでご自身が書かれた著作の「あとがき」を順に紹介しながら、それにコメントをつけるのである。原先生の「あとがき」には、自分がその本を書こうと思った素直な心の働きが表現されている。そこに一貫しているのは、「普遍」を強調する新古典派経済学の伝統にアジアの現場から疑問を呈し、普遍と特殊の対話を試る姿勢である。日本とアジアという自分の立っている場所に、自分の使う分析道具（＝経済学）を引き戻す努力を最後まで続けた人であった。

原洋之介先生のエリア・エコノミックスに思いを寄せて

拓殖大学国際学部　准教授
椎野幸平

原洋之介先生のご講義は、いつも熱気に包まれていました。原先生との出会いは、国際開発センターの開発エコノミストコースでご講義を受けたことがはじまりです。当時、日本貿易振興機構（ジェトロ）に勤務していた私は、一年間勉強する機会を与えられ、様々な出身母体の一〇名の同級生とともに、原先生をはじめとする多くの先生方のご講義を受講させて頂いていました。時代はアジア興隆の一九九六年、経済学、そしてアジアを勉強する日々でした。

原先生のご講義は、学生との議論を通じながら、経済学、アジアの世界観を広げていくというスタイルです。深い経済学への知見に基づくとともに、多様なアジアの世界を独自の視点で語られるその内容に強く惹きつけられたことを鮮明に覚えています。そして、アジア経済における政府の役割、多様な経済発展経路にも触れ、新古典派批判を存分に展開されていました。

原先生の世界観は、複雑で容易に語ることはできませんが、経済学と地域研究の融合にその中心があったと理解しています。一九九九年に出版された『エリア・エコノミックス アジア経済のトポロジー』の冒頭で、原先生は「経済学とは、地域研究と最も縁遠い社会科学である。こうアジア研究者は断言している。（中略）地域研究 Area Studies と親近性を持つ経済学も存在しているのだ。それをエリア・エコノミックス Area Economics と名づけよう」と提唱されています。深い経済学への造詣とともに、地域の歴史・固有性に原先生の関心が強く照射され、独自の世界観を生み出されていました。